

開催地名：秋田県秋田市	
開催日時	令和2年2月8日（土） 13:30 ～ 15:00
開催場所	秋田市役所
語り部	菅原 康雄 （宮城県仙台市）
参加者	秋田市防災安全対策課職員、秋田市内自主防災組織等 約100名
開催経緯	西日本豪雨や北海道胆振東部地震など想定外の自然災害が多発していることから、防災に対する関心は高まっているが、具体的にどのような活動をするべきか悩みを抱えている自主防災組織が多い。また、高齢化などの理由で、自主防災組織の結成に消極的な地域がある。今回語り部の講演会を開催し、今後の防災活動について考えるきっかけとしたい。
内容	<p>（1）行政に頼らない独自のマニュアル作り</p> <p>福住町は仙台市宮城野区のほぼ中央に位置している。私は町内会の執行部として長年活動に関わってきた。福住町では、全国に先駆けて町内会として独自の防災活動を行ってきた。まず平成15年に重要支援者1,000名分の名簿を作成した。そして同年、防災マニュアルを作った。町内会主導の活動は全国でも珍しい頃であった。また、同年、ほかの市町村町内会、市民団体と災害時相互協力協定を結んだ。国にもこうした協定の発想がなかった頃で、おそらく全国初だったのではないだろうか。さらに、防災訓練を毎年11月に実施、東日本大震災の4～5年前には町内会役員が重要支援者宅を回り、家具の転倒防止、ガラスの飛散防止などの予防措置を行った。地区内の全世帯の名簿作成も行い、重要支援者を把握するとともに、1年に1回情報を更新した。東日本大震災は、これら事前準備の延長線上で乗り切ったという実感がある。</p> <p>（2）東日本大震災当日の動き</p> <p>まず名簿によって安否確認を行った。当時57世帯73名が重要支援者であった。震災後1時間の間に2回安否確認をすることができた。大地震発災時は、家の中に物が散乱していて名簿を探し出すことが難しいが、皆、重要支援者が頭の中に入っていたので迅速に行動できた。日頃の訓練のためものだった。避難所となった集会所にはプロパンガスを常備し、発電機を備えていたのでそれが役立った。食料の備蓄は、集会所に収容できる100名の1週間分程度である。しかし、食料を求めて訪れる人にも分けていたら3日間でなくなった。発災から4日目に今後を案じていたとき、災害時相互協力協定を結んだ山形の尾花沢市から、おにぎりや温かい味噌汁が届けられた。また新潟県小千谷市池ヶ原地区からは米やガソリンが運ばれ</p>

た。さらに5日目にはハム・ソーセージも1トン近く届き、当座を間に合わせる事ができた。喜ばれたのは熱湯である。乏しい水を集めて熱湯にして避難所に約1カ月間、多いときは朝昼晩バケツで届けた。仙台の3月はまだ氷が張っている。避難者からは非常に好評であった。避難所での暮らしは約2週間で終わり、続いて町では他の市町村への「他助」の取組を行った。食料以外の備蓄品がたくさんあったので、1割程を町に残して、それ以外をほかの地区に届けた。できるだけ行政の支援が届かない所を選び、翌年までの1年間に約109か所へ運んだ。

#### (4) 今後の課題と心構え

震災の体験を経て課題と感じたことがある。例えば避難所では、在宅避難者におにぎりなどを配布できなかった。食料を求めて30分かけて歩いて来た高齢者がいても、避難所ではなく自宅にいるというだけで、救援物資を分けることができない。こうした点は今後の課題になるだろう。今回は、町独自で継続してきた防災の取組が非常に有効に機能した。メディアからは「福住町方式」と呼ばれ、さまざまな媒体で取組が紹介された。防災に関して福住町では「隗(かい)より始めよ」ということを大切にしている。これは思い立ったが吉日、という意味である。予算がない、人手がないと思うのではなく、何とか工夫をして準備に着手する。物がなければ皆で持ち寄って工夫すれば良い。災害はいつ発生するか分からない。こうした心構えを大切にしていきたい。

止むことのない災害に、強い危機管理意識を持って、自分が助かるすべてを真摯に検証し、たったひとつの大切な命を守りぬく強固な意志を貫いていきたい。それが皆さんに対する私からのお願いである。



開催地より

町内会自らが災害協定を締結していることは、全国的にも大変珍しく、先進的な取組であると感じた。また、行政をできるだけ頼らず、町内会の力で災害を乗り越えようとする気概や行動が講話から感じられた。リーダーとして自主防災活動に積極的に取組んでいくことの大切さを改めて感じた。今後の防災活動に役立てていきたいと思う。